

## 堀 哲郎先生 追悼のこぼ

九州大学大学院医学研究院統合生理学教室准教授

片渕 俊彦

九州大学名誉教授・堀哲郎先生は平成 21 年 8 月 22 日、70 年の生涯を閉じられました。

堀先生は昭和 36 年名古屋大学医学部をご卒業後、翌年に名古屋大学大学院医学研究科生理系生理学専攻に入学され、生理学第一講座において高木健太郎教授（後に参議院議員）と中山昭雄助教授（後に大阪大学医学部教授）のご指導を受けられました。堀先生がご退官にあたりご自分で著された研究回顧によると、「二人の恩師から生理学の基礎と自由で且つ緻密な科学的思考を徹底的に叩き込んで頂きました。出発点においてお二人の教育がなければ生理学者として本当に独立できたか疑わしいと思います。」と述べられています。当時の名古屋大学医学部生理学第一講座は、「半側発汗」を発見された高木健太郎教授をはじめ視床下部の温度感受性ニューロンを発見された中山先生、および小川徳雄先生、永坂鉄夫先生、熊沢孝男先生、小坂光男先生など日本の温熱生理学の発展に大いに貢献された先生方が多数在籍されていました。

昭和 42 年堀先生は、米国ペンシルヴェニア大学医学部生理学教室に留学され、延髄の中枢性呼吸化学受容器の研究、および呼吸調節の電算機モデル作成に従事されました。帰国後、温熱生理学の研究を本格的に開始され、ニホンザルの体温調節行動や、多連微小電極を用いた電気生理学的な手法で先駆的な研究をされました。その後昭和 47 年に熊本大学体質医学研究所生理学部の助教授に就任され、ご研究がますます発展するとともに数多くの国際学会に参加され、堀先生ご自身のお言葉によると、「当時の世界中の温熱生理学者はほとんど同年輩で、その圧倒的力量で 1970-90 年にか



けての二十数年間の温熱生理学の大発展を可能にした」ということでした。

昭和 53 年に新設の佐賀医科大学第一生理学講座の教授に就任され、清原壽一助教授（後に京都工芸繊維大学教授）、中島敏博先生（後に京都工芸繊維大学教授）、柴田政章先生、大阪壽雅先生らと温度感受性ニューロンに関する新しい研究を次々に報告されました。佐賀医科大学では、内因性発熱物質であるサイトカインの温度感受性ニューロンに対する作用について研究を開始され、その後九州大学へ異動された後に本格的に研究がスタートした脳・免疫系連関の研究へと発展することになります。

堀先生は平成 12 年のご退官にあたり、ご自分の研究を大きく 3 つにわけて回顧されています。第一番目はアメリカ時代の呼吸調節に関する研究

で、第二が熊本大学および佐賀医科大学における温熱生理学に関する研究です。そして第三が九州大学に來られてからの脳・免疫系連関の研究です。九州大学にこられて後、1994年から1996年まで3年連続で内藤国際カンファレンス「神経・免疫・内分泌ネットワーク」を、1998年には谷口国際シンポジウム、“Brain and Biodefence”という国際学会を組織され、国内外で活躍されました。ご研究の内容は、大きく1)脳による免疫系の制御、2)免疫系から脳へのシグナル伝達機序の解明、3)免疫系からのシグナルとしての炎症性サイトカインおよび関連物質の中樞神経系への作用、に分けられます。これらは当時免疫学および神経生理学の研究者たちがそれぞれ手をつけられなかった学際的研究に敢えて挑戦された結果で、温熱生理学者として発熱を脳・免疫系連関の最も典型的なモデルとして論じただけでなく、ストレス・免疫応答の機序としてのオピオイド/サイトカイン・視床下部・交感神経・免疫軸の発見や、感染時の痛覚過敏、および学習記憶行動の変化など、広い範囲にわたって脳・免疫系連関の重要性を示されました。このことは堀先生の見識の高さと広い興味、そして自由で且つ緻密な科学的思考によるものだと思います。

堀先生が九州大学医学部第一生理学講座の教授として赴任されたのは平成元年4月でした。私が堀先生のもとでお世話になったのは、御退官までの10年あまりですが、堀先生に教えていただいたことやその間の思い出はたくさんあります。実は、私が堀先生と親しくお話をさせていただいたのは堀先生がまだ佐賀医科大学におられた時でした。新潟大学の新島旭先生の研究班の班会議が瀬波温泉で行われたとき、新潟駅からの電車の中でたまたま向かい合わせになり、瀬波温泉に着くまでの間ほとんどずっとお話をされました。まず議論が大好きな先生だなという印象と、その内容はおもに視床下部に関するものでしたが実に理論的で説得力があったのが思い出されます。後に九州大学に來られて直接指導していただくとは思いませんでしたが、九州大学に來られても身近な話題から学問的な話まで、機知に富んだたとえを挿

入されながら、結論が出るまでお話をされました。実験に関するディスカッションでも同様でした。堀先生をご存じの方はみなお感じになったかと思いますが、実に論理的で、質問に対してお答えする際にまず、「その理由は〇つある。その一つは…」というように、話をされるときにはすでに頭の中で答えが組み立てられている、と言う印象でした。

堀先生が九州大学に來れることが決定したとき、私は米国に留学中でしたが、堀先生から直接お手紙をいただき驚いたのを覚えています。その中に「研究とは知的なゲームである」という一節がありました。実際、九州大学で指導していただいた研究は、綿密な事実の確認とひらめきのもとに緻密な戦略を立て、着実に実行していくことでゲームに勝利するという方法でした。また堀先生は、生理学とは原理(principle)を作り上げる学問である、ともよく言われていました。-ology学問の意義が問われる中で生理学の行く末を憂慮したお言葉だったのかもしれませんが、堀先生は今こそ時間を気にせず心ゆくまで議論をされていると思います。厳密な考えのもとに問題を追求される研究者であると同時に機知に富んだお人柄を偲び、謹んで堀先生のご冥福をお祈り申し上げます。

堀 哲郎先生 御略歴

昭和12年3月25日	大阪市に生れる
昭和36年3月	名古屋大学医学部医学科卒業
昭和41年3月	名古屋大学大学院医学研究科生理系生理学専攻修了
昭和41年4月	名古屋大学医学部・生理学第一講座・副手
昭和42年10月	米国ペンシルヴェニア大学医学部生理学教室・研究員
昭和44年12月	名古屋大学医学部・生理学第一講座・助手
昭和47年6月	熊本大学体質医学研究所・生理学部・助教授
昭和53年4月	佐賀医科大学医学部・生理学講座・教授

昭和 55 年 5 月	佐賀医科大学附属図書館長 (昭和 57 年まで)	平成 12 年 3 月	一講座・教授 九州大学を停年により退官
昭和 63 年 4 月	佐賀医科大学評議員 (平成 元年まで)	平成 12 年 4 月	九州大学名誉教授
平成元年 4 月	九州大学医学部・生理学第	平成 21 年 8 月 22 日	呼吸不全のため逝去 瑞寶中綬章を授与される